

点から線、そして面へ（1）

飯塚 義幸

樹齢140年超、畳600枚分相当の大藤棚を擁し、今や全国的な知名度を誇る「あしががフラワーパーク」(栃木県足利市迫間町)であるが、その昔、「早川農園」と呼ばれていたことを知る人はどれだけいるだろうか？

あしががフラワーパークの前身である早川農園は、現社長早川慶治郎氏の父和俊氏が、今より市街地に程近い足利市堀込町に昭和43年に開園した植物園である。当時より藤棚の大藤が有名であったが、年間入園者数10万人弱と規模はそれほど大きくなかった。実は、足利市は私の生まれ故郷であるが、早川農園は幼稚園の遠足の定番であり、いわゆる「地元で愛された植物園」であった。

この早川農園が現所在地である足利市の郊外に移転することになった時、困難と言われていた大藤の移植に3年掛かりで挑戦したのが日本初の女性樹木医である塚本こなみ氏(現はままつフラワーパーク理事長)である。大藤の移植が無事に成功し、平成9年にあしががフラワーパークと名前を改めて開園した後は、平成11年より園長となった塚本氏を中心に、目玉となる大藤のPRや花の見頃に合わせて入園料が変わる変動料金制の導入、花の少ない冬期におけるイルミネーション開催といった様々な策を実行することで、同園は年間入園者数100万人を超える一大観光スポットに成長したのである。

しかし、私が実家に帰省した際、父母に問いかけた「あしががフラワーパークにこれだけの人が来ているのだから、足利の経済も多少は潤っているのではないか？」との質問に対する答えは「否」であった。「フラワーパークには人が来ているが、殆どは大型観光バスで直接乗り付け、同園に2～3時間滞在した後、またバスで帰ってしまう。地元からすれば交通渋滞が酷くなるだけだ。」

確かに、あしががフラワーパークを訪れるバスツアーのパンフレットを見てみると、大部分が同園及び近隣

のアウトレットモールを巡る日帰りツアーである。中には宿泊ツアーもあるが、その宿泊先は足利を通り越して日光・鬼怒川温泉に行ってしまう。足利は他にも日本最古の大学である「足利学校」や、足利氏の館跡・氏寺である「鑲阿寺」等の観光スポットを抱えるが、これらはあしががフラワーパークから少し離れた中心市街地にあるため、同園の来園者を十分に取り込めているとは必ずしも言い難い。

もちろん、それぞれの観光スポットは、日本遺産への登録(足利学校)や国宝への指定(鑲阿寺)といった「点」としての魅力を高める努力を行っているが、「点」のままでは集客力は限界的であるし、地域への経済波及効果も限定的である。まずは、各々の「点」と「点」との結び付きを強化し、「線」として繋ぐことで地域全体の魅力と集客力を高めていく必要がある。

但し、「線」を繋ぐと言っても、単純にバス等の公共交通機関網を充実させる、又は各観光スポットを巡るバスツアーを企画するといった形では、道中の地域の存在は無視され、そこから「面」としての広がりを期待することはできない。いわば「点線」で繋いでいるようなものである。「点」と「点」を「点線」ではなく「実線」で繋ぐ努力・工夫を行うことで、初めて「面」としての広がりが生じる可能性が高まり、ひいては地域の魅力や集客力、経済波及効果の向上を通じた地域全体の活性化が図られるのではないだろうか。

今回は、この「点」を「実線」で繋ぎ、「面」へと広げる努力・工夫を行っているいくつかの取り組みを通してこの課題について考えてみることにしたい。